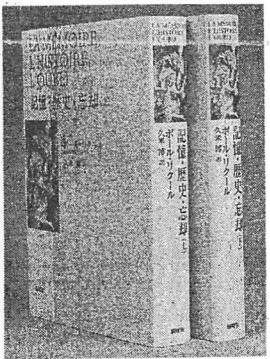


評者・神崎 繁（首都大学東京教授）

リクルールの著作を読むことには、何か独特の危険がつきまといっている。それは同じく現代フランスを代表する哲学者で、近年相次いで鬼籍に入ったレヴィナスやデリダの、特異な語法や思考回路に潜む危険ではなく、むしろ関連する多方面の論者の研究を紹介しながら、いわば他者に語らせることによって自らを表現するリクルールのスタイルから来る危険である。

たとえば、1980年代以降、冷戦構造の崩壊にともなって「歴史の終焉」が唱えられ、また実証的な歴史叙述への不信から、「物語」の重要性が注目されるようになったが、そうした試みを代表するものとしてリクルールの『時間と物語』は、「新しい歴史教科書をつくる会」に参加した故・坂本多加雄によって自国中心史観の論拠とされた。他方、これとは対照的立場の政治学者・最上敏樹は、『人道的介入』（岩波新書）で、正義のための武力行使に関して、

### 「過ちの深さ」認める勇氣



新曜社  
上5300円 下4500円

## 記憶・歴史・忘却

ポール・リクール著

「人の苦しみはそれを見た者に義務を負わせる」というリクルールの考えをやはり論拠として援用した。これらはおそらく完全な誤読でないとしても、引用の綴れ織りとも言うべきリクルールの著作のもつ危険性の一端を示すものである。過去の歴史的記憶をめぐる問題群が、いわば「棘」となつてわれわれの思考に刺さった状態がつづいている現在、本書が「記憶」を「歴史」から区別して、その操作や濫用から議論を始めているのは重要である。だが、それ以上に重要なのは、「過ちの深さ」を自ら認めることと、それに対する無償の贈与としての「赦しの高み」について語る本書の珠玉の末尾である。

「その共同体の記憶が、他の共同体の苦しみに対して目をつむり、耳をかきなくなるほど、自分自身の苦しみに退き、閉じこもる」ことへの著者の最後の警鐘に、われわれは耳をすますべきである。

絶筆となった本書を含め、リクルールの大半の主著を訳された久米博氏の労をねぎらいたい。

◇P・リクール 1913～2005年。現代フランスを代表する哲学者。